

## 修論中間発表会

報告 久野量一

大学院の授業中、外大ではない別の大学から聴講に来ていた学生が、修論中間発表会なるものがあることを教えてくれた。言われてみれば、そういう催しはやっていない。本学大学院生のカリキュラムでは、異分野交流ゼミという枠で他地域・他言語の研究仲間と知り合う機会はあるものの、そのときに築いた関係もそれっきりで終わってしまう場合も多いらしい。それもあって、他大の話を聞いた大学院生は是非やりたいという。で、早速研究所長の沼野先生にメールをして、総合文化研究所の企画としてやってみるのはいかがかと提案した。返事が来たのはメールを送ってから十三分後。「とても有意義なご提案をありがとうございます！ ぜひ実施しましょう」

そのやりとりが六月終わりのことだったので、開催日は三ヶ月後の秋学期開始に合わせ、十月二日選ばれた。総合文化研究所に所属する教員が指導する学生ということにして発表者を募ったところ、九名が手を挙げた。学生にとってみれば、その時点で中間発表まで三ヶ月あるので準備期間はたっぷり、また中間発表から修論提出までほぼ三ヶ月あるから、いい時期だったのではないだろうか。とはいえ、後からわかったのだが、(教員からみれば)この日は会議日だった。多くの教員が会議を抜け出して参加したり、その後また会議に戻ったりということ

になってしまった。ではそれ以外の日があるかというと、十月のカレンダーをみると、会議の入っていない水曜日は一日だけ。やっぱり会議が多すぎると思うのだが……

それはともかく、プログラムは別に掲げているとおりで、地域も言語もテーマもさまざまである。当日は発表が十五分、質疑が五分で、ほとんどの発表者がパワーポイントを使用した。どれくらい聴衆が来るのかは心配といえば心配だったが、蓋を開けてみると盛況だった。これから修論を書くとする一年目の院生や後期課程の学生も顔を出していた。終了後は前のピザ屋で懇親会。けっこう遅くまであれやこれやと話していた。

そして年が明けて一月、いよいよあの時に発表していた内容の論文を受け取ったところである。中間発表を聞いておくと、修論審査の予習になるので、そういう意味でもこの催しは有意義だ。もちろん学生にとって有意義であることが何よりなのだ。

なにはともあれ、第一回修論中間発表会は大成功だった。

発表者・題目

市野太音(トルコ)

トルコの短編作家オメル・セイフェッティンと「無力な少年」

豊口彩乃(ベنگル)

タゴール劇における「タクルダ」とは何か——戯曲『オチョラヨトン』を中心に

山本ゆみ(ベنگル)

現代バングラデシュ文学作家ハッサン・アジズル・ホク(Hasan Azizul Huq)の小説『火の鳥 Agunpaksi』より——その結末について

菊地圭祐(南アジア)

南アジアの宗教対立——アーリヤ・サマージとイスラームにおける神学上の争点について

新谷和輝(キューバ)

キューバ映画の公共圏——一九六〇年代を中心に

中川美枝子(オーストリア)

エリアス・カネッティ作品にみる「目」の役割——小説『眩暈』のペーター・キーンの見覚と世界認識の分析

奥村文音(ロシア)

フレーブニコフの回文詩作品をめぐって

仲谷航(ロシア)

ロシア革命期の思想における観念論——建神主義とレーニン主義の共通項を探って

小林淳子(ロシア)

エドゥアルド・ウスペンスキー著『魔法の川をくだって』についての一考察——現代ロシア児童文学における「民話のアダプテーション」という視点から(仮)

二〇一九年十月二日(水)